

平成29年度学術交流協力締結校学生交流プログラム参加報告

—韓国中央大学校赤十字看護大学との交流—

山本直子¹⁾, 水野昌美¹⁾

要旨 「小児看護学概論」の授業科目で平成29年度学術交流締結校学生交流プログラムに参加した。学生は小児看護に関して興味のある事柄（学習テーマ）を持って参加した。研修を通して、医療を含めた文化等の類似点、相違点を確認していた。教員は今後も講義や課外活動を通して学生が異文化理解、外国語に触れる機会を益々増やす努力をする必要があると考える。

キーワード：学術交流協力締結校学生交流プログラム、小児看護、韓国

1. はじめに

本学医学部は平成24年に、韓国中央大学校赤十字看護大学（Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University: 以下 CAU とする）と部局間の学術交流協定を締結し交流を重ねている¹⁾⁻⁴⁾。学術交流協定5年目を迎える今年は8月27日から6日間の日程で「平成29年度学術交流締結校学生交流プログラム」（2017 Global Nursing Student Exchange Program）が実施された。

本年度は国際社会で活躍できる人材育成支援のための「鹿児島大学学生海外研修支援事業」に「小児看護学概論」の授業科目で申請し採択された。参加した学生は前述科目を履修終了した学生の中の6名であった。教員は2名同行し、鹿児島大学学生海外研修支援事業への申請者すなわち授業担当職の教員であった。

「小児看護学概論」は1単位15時間、2年次生の必修科目である。科目目標は、小児看護の現状や看護師に求められている役割について学ぶこと、また、諸外国の小児看護の現状を理解し説明出来ることである。よって今回の研修目的を3つ設定した。研修目的①は、小児看護学概論の科目目標と照らし合わせ、韓国の小児保健及び小児看護の変遷や現状を知るとした。また、研修目的②は、参加者が看護学専攻の学生であることを考慮し、多面的に医療や看護のあり方を考えることが出来るとし

た。最後に研修目的③は、訪問先が韓国であることを考慮し、英語や韓国語でのプレゼンテーション能力やディスカッション能力を身に付けることとした。

今回、学術交流締結校学生交流プログラム参加の準備と実際、その学びについて報告する。

2. 学術交流締結校学生交流プログラム参加準備

学術交流締結校学生交流プログラム参加約3か月前に、看護学専攻3年次生を対象に研修の説明を行い、参加者を募った。参加者には応募理由、小児看護に関して興味のある事柄（以下学習テーマ）、研修参加にあたり学習テーマ準備計画、学んだことをどのように役立てていくのかについて既定の様式に記載し提出してもらった。引率予定教員2名で書類審査を行い、6名を選抜した。

学習テーマは子どもの意志決定・遊びや学習・倫理（家族ケア）・母乳やおやつなどの栄養・子どもの権利保障や危機管理・家族の在り方（儒教）であった。

参加者決定から研修参加まで計4回オリエンテーションを行い、学生全体と個人で英語でのプレゼンテーション準備を行った。グループ全体のプレゼンテーションの内容は、鹿児島や日本の紹介、学生個人では、学習テーマについての日本の状況の紹介と学習テーマに関する韓

¹⁾ 鹿児島大学医学部保健学科看護学専攻
連絡先：山本直子
〒890-8544 鹿児島市桜ヶ丘8-35-1
Tel/Fax: 099-275-6791
E-mail: naoko-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

表1 2017 Global Nursing Student Exchange Program Schedule

Date	Time	Program	In-charged by
8.27 (SUN)	~ 17:30	Arrive at the the Incheon Int'l Airport	Prof. Sim, Ms MOUNG,
	~ 20:00	Check in the Guest house (Blue Mir Hall)	
8.28 (MON)	8:00 ~ 9:00	Breakfast (Blue Mir Hall restaurant)	
	9:30 ~ 11:00	Welcome remarks by vice- President, Dean Introduction to Red Cross College of Nursing, CAU Exchange Program Orientation	Vice-President, Dean Prof. Back, Prof Sim, Prof. Lee Ms Meoung,
	11:00 ~ 12:00	Facility Tour at Red Cross College of Nursing (BULD 103 & 102, 7th Fl. SPRING Center)	Ms MOUNG, Two Students
	12:00 ~ 13:00	Welcome Lunch at University Club (11th FL, BULD 102)	Dean, Director, Prof. Sim, Prof Lee
	13:00 ~ 15:00	CAU Campus Tour	International Staff, 2 Students
	15:00 ~ 18:00	Observation: Child of Nursing Practice (Simulation room)	Prof Sim, Students for translation
	18:00 ~ 17:00	Dinner with Buddy	
8.29 (TUE)	10:00 ~ 12:00	Welcome by President of CAU Hospital Tour :	Team Manager S. Han (6299-2527) Prof Sim, Prof Lee, 2 Students
	12:00 ~ 13:00	Lunch with hospital	
	13:00 ~ 17:00	Clinical Practice at CAU hospital: NICU, Pediatric ward (KU 6 students with 2 CAU students)	Professors: attending Seminar
	17:00 ~	Debriefing at SPRING Center, 7th FL, BULD 102	2 students for translation
8.30 (WED)	10:00 ~ 12:00	Visit CAU Kindergarten	Prof. Sim, Ms Meoung, 2 Students
	12:00 ~ 13:00	Lunch	
	13:30 ~ 15:00	Visiting Dongjak Health community Center	Director G. Park (010-9772-7129): Prof. Son, 2 Students
	15:30 ~	Visiting Korean historical facilities (Bukchon Hanok village etc)	Prof. Sim, Ms Meoung, 2 Students
8.31 (THU)	10:00 ~ 12:00	Visiting Center for Simulation Practice in Nursing (SPRING CENTER)	Prof Roh
	12:00 ~ 13:00	Lunch	
	13:00 ~ 15:00	Farewell Party	Vice-President, Dean, Prof Back , Prof Sim, Prof Lee, Prof Son Ms MOUNG, Students
	17:00 ~ 18:00	Dinner	
9.1 (FRI)	06:00 ~	Check out and Move to ICN by Limousine Bus (AM 9:20 departure at international airport)	Prof Sim, Ms MOUNG

国の状況について質問する準備を行った。教員は学生の主体性を重視し上記に関する支援を行った。

3. 学術交流締結校学生交流プログラム参加の実際

表1に2017 Global Nursing Student Exchange Program Scheduleを示す。6日間の日程で、CAU、中央大学病院(NICU・小児病棟)、中央大学付属幼稚園、保健センターを見学した。またCAUの大学内では講義の聴講と参加学生のプレゼンテーション、看護技術試験の見学、シミュレーション演習への参加とCAU学生とのディスカッションを行った。

1) CAUにおける活動

(1) キャンパスツアー

CAUは、10学部と16大学院から構成され、学生数およそ3万人と教員982名の規模の大きい私立大学である。

歓迎式典(写真1)後、キャンパスツアーをしてもらった。キャンパス内は、急傾斜が多く、敷地も広いため、移動のためのバスが定期的に運行していた。また、カフェがとても多く、学生が飲み物を片手に歩く姿や講義を受ける姿が目立った。外国人の学生も多く見かけた。

(2) 講義聴講及びプレゼンテーション

看護学部2年次生の「Global leadership Class」の講義を聴講した。韓国では9月から新学期が開始するため、聴講した講義は第1回目で内容はオリエンテーションであった。講義の進め方や、課題の提示など韓国語での説明が主であったが、次回からの講義は、ほとんど英語で行われるということであった。韓国の学生は、積極的に質問していた。講義終了後、本学学生6名でパワーポイントによるプレゼンテーションを英語で行い、鹿児島県及び鹿児島大学の紹介を行った(写真2)。韓国の学生は興味深そうにプレゼンテーションを聞いていた。



写真1 歓迎式典の様子



写真3 看護技術演習参加後のディスカッションの様子



写真2 鹿児島県及び鹿児島大学の紹介をする様子

(3) シミュレーション演習

CAU内にある「Simulation Practice in Nursing Center」(通称 Spring Center)は、患者の安全と看護ケアの質の向上を図ることを目的に設立された、看護技術演習のための施設である。ICU、ER、手術室及び在宅看護演習室があり、看護学生だけでなく、大学病院職員やその他ソウル市内の看護師の研修に利用されているとのことであった。各室内の設備に関しては、隣室のモニタールームから教員がマイクで指示を出したり、モデル人形のバイタルサインや呼吸状態などをコンピューター制御が可能な施設であった。

CAUの学生は担当教員の指導の下、少人数クラスで自主的に看護技術演習を行っていた。大韓看護協会では、看護師教育の中で学生が卒業時まで習得すべき看護技術20項目を指定しており、教育機関はそれに即したカリキュラムを作成しているとのことであった。Spring Centerでの看護技術演習や看護技術試験も大韓看護協会が指定した項目に沿って行われているとのことであった。

CAUの学生は病院実習と看護技術演習を交互に2週

間ずつ行い、看護技術演習の最後には、看護技術試験が行われていた。その際必要に応じて看護技術試験の様子を録画し、後でディスカッションできるようになっていた。また、コミュニケーション技術の試験では、一般から患者役を募集し、トレーニングを受けた模擬患者が終了後に評価を行っているとのことであった。

今回、本学の学生もCAU看護学科3年次生と一緒にモデルを使った筋肉注射の看護技術演習に参加してもらい、終了後行った看護技術に関するCAUの学生とディスカッションを行った(写真3)。

2) Chung-Ang University Hospital

Chung-Ang University Hospitalは1968年に設立された総合病院である。創造的な診断、研究と教育システムを通して健康と幸福に貢献することを目的に、人間味あふれた情熱をもって患者中心のケアを提供しており、常に顧客満足度が高い病院であるというオリエンテーションを受けた。

本学の学生は2つのグループに分かれ、小児病棟とNICUを交互に見学した。NICUには、感染者用のベッドスペースが用意されており、救急車で搬送された場合は、まずそちらに収容されるということであった。NICUから小児病棟へ転棟する児はほとんどおらず、そのまま退院となるため、母親が面会に来た際に沐浴指導や授乳指導を行っていた。母親が面会に来た際に沐浴指導や授乳指導を行う点が日本と同様であった。またタッチングを推進しているとのことであった。日本と同様にNICUにて母親へ児へのふれあいを促し、愛着形成を促進する看護が行われていた⁵⁾。

小児病棟は、日本と同じように個室と6人部屋があったが、部屋の中央に共用のテレビが1台、部屋の入り口にはトイレ、冷蔵庫、シャワー室が設置されていた。韓国の付き添い状況は、小児のみならず、成人の患者でも



写真4 CAU Kindergartenでの手作りの遊具



写真5 Dongjak-gu Community Health Centerでの離乳期の食事指導の模型

家族が付き添っているということであった。病室には家族用のベッドも用意され、入院した子どもの親に対して、手紙と花を贈って労わるという心配りがなされていた。また、入院すると遠くの親戚もお見舞いに来ることが多く、12～14時・18～20時が面会時間となっており、病院から渡されるバンドを手首に巻くことで許可証代わりになるということであった。院内学級はなく、面会室と隣り合わせで小さなプレイルームがあったが、おもちゃは置かれていなかった。

3) CAU Kindergarten

CAUより2年早く1916年に設立され、100周年を迎えた幼稚園であり、早くから幼児教育研究に力を注いでいたとのことであった。職員33名、園児が150名在園している。韓国では満年齢ではなく数え年が用いられているとのことであった。園児は数え年で3歳児クラス40名、4歳児クラス50名、6歳児クラス60名で2クラスに分けられていた。入園は公正に抽選で、倍率30倍ということであった。幼稚園の3つの目標は、①心と体が健康で自立できること②より良い人格と創造性を育むこと③共に過ごし人とのつながりが重要であるとわかることであった。園内には、貸し出しのできる図書室があり、それぞれのクラスには、園児と話し合い保育士が手作りしたおもちゃが多数みられた(写真4)。幼稚園児の預かり時間は通常17時までであるが、働く親の都合に合わせて19時まで延長保育が行われていた。また、事故防止のための安全教育や防犯カメラの設置、警察に園児の顔写真を登

録するなど安全対策についての説明があった。

韓国の保育園は、数え年で1～3歳までと1～7歳の2種類があるとのことであった。満年齢に置き換えると、韓国の保育園でも我が国同様、0歳児保育を行っているとのことであった。また、小学校入学時期は数え年8歳であるとのことであった。小学校入学まで保育所に在園可能であるが、幼児教育を重視した幼稚園への入園を希望する親が多く、3歳になると幼稚園へ移る子どもが多いとのことであった。

4) Dongjak-gu Community Health Center

Dongjak-gu Community Health Centerは、一般職員150名、看護師31名、保健師20名と人数は不明であるが医師が働いており、住民中心の医療サービスと保健サービス、健康情報を提供しているとのことであった。日本と同じように、①母子の健康管理②メンタルヘルス③訪問看護④認知症看護ケア⑤健康増進⑥医療費サポート⑦健康教育を中心に取り組まれていた。複数の診察室や栄養相談室、禁煙相談室があった。栄養相談室近くには食事指導の模型が展示されていた(写真5)。禁煙地区での喫煙には多額の罰金が科せられるなど、韓国でも禁煙運動に力を注いでいることがわかった。このため禁煙相談に訪れる住民は非常に多いということであった。

また、Community Health Centerには決められた疾患について処方が出るAdvanced Practice Nurse⁶⁾はいないとのことであった。このため医師の診察を受けた地域住民は、医師から必要があれば、健康上必要な薬剤をされる



図1 学術交流締結校学生交流プログラム参加報告会開催案内ポスター

ということであった。

4. 学術交流締結校学生交流プログラム参加とその学び

1) 報告書

学生及び教員は所定の様式に研修終了後約2週間以内に海外研修報告書を記載した。

2) 報告会開催

報告会開催にあたって、教員と相談しながら、各学年

の学生が参加しやすい日時やランチオンセミナーにする、1回の開催時間を短くし、2回に分けて開催するなど開催形式を工夫した。開催告知は学生が各学年に開催と出席を呼びかける一斉メール配信を行った。また、学術交流締結校学生交流プログラム参加報告会開催案内ポスターを作成し(図1)エレベーター内や掲示板等に掲示した。

発表内容については教員等と相談しながら、グループ全体での学び及び個人の学習テーマに沿った学びをパワーポイントで作成し発表した。

報告会は1回目2017年12月1日、子どもの権利、子どもの遊びや学習・倫理（家族ケア）、子どもの入院と家族のあり方（儒教）2回目は2017年12月14日、子どもの意思決定支援、子どもの栄養、韓国の看護について発表した。出席者は各回45名程度で、主な出席者は看護学専攻2年次生であった。発表後出席者からの質問が数件あり、報告会の内容が出席者にとって関心のある内容であったと考えられた。質問に関して即答出来ない内容については、自分で調べて後日回答していた。また調べてもわからないことはCAUの学生に尋ねて情報を得たということであった。学術交流締結校学生交流プログラム終了後もCAUの学生との交流が続いていることが伺われた。

3) 学術交流締結校学生交流プログラム参加を通して学んだこと

本学の学生はCAUの学生とのグループディスカッションや施設見学の際、各自事前学習した内容について日本の現状の説明を行うと共に、韓国の現状を積極的に質問し知見を得ていた。特に子どもの栄養において、おやつや位置づけやその内容に違いがあること⁷⁾、子どもの安全対策では予測される事件や事故⁸⁾がそれぞれの国で違うこと、病院での保護者の付き添いやお見舞いに関する意識の違い⁹⁾があることをディスカッションを通して学ぶことが出来た。

講義の聴講や看護技術演習に参加して、CAUの学生が活発に教員に質問しディスカッションしている様子や、医療用語が韓国語ではなく英語で使用されていること、英語は日常的な会話にも用いられそのレベルが高いことに大いに刺激を受けた様子であった。会話を通してCAUの学生は小児看護学実習では受け持ち患児がなく、フィジカルアセスメント中心の実習であることを知った。一方、本学の学生は小児看護学実習において、受け持ち患児がおり、フィジカルアセスメントだけでなく、清拭や退院指導の一部などを看護師と一緒に実施、評価することが出来る。このような実習環境の違いをディスカッションを通して知ることが出来た。しかし、看護を行う上で、対象者の思いに寄り添うことを大切にしている点は共通していることにも気づいていた（写真3）。

報告会を通して、研修に参加した学生の学びを他の学生と共有出来たと考える。以上のことから進取の精神が発揮されつつあると感じられた。研修目的は十分に達成出来たと考える。今後も講義や課外活動を通して学生が異文化理解、外国語に触れる機会を益々増やす努力をする必要があると考える。また、学術交流においては、学生だけでなく同じ科目を教授する教員とも研究や授業内容等についてディスカッションする機会を得た。今後の

学生教育に役立てていきたいと考える。

文献

- 1) 中尾優子, 八代利香, 津留見美里, 他: 鹿児島大学学生海外研修事業の報告(助産学コース大学院生) —韓国での産後ケアセンター, 母乳育児支援センター訪問とプレゼンテーション体験—. 鹿児島大学医学部保健学科紀要2015; 25(1): 19-24
- 2) 山口さおり, 稲留直子, 八代利香, 他: 学生海外研修における大学教員の役割と今後の課題. 鹿児島大学医学部保健学科紀要2016; 26(1): 73-81
- 3) 益満智美, 石橋絵里, 伊藤成美, 他: 韓国中央大学校瀬給仕看護大学との交流における学生の学び—OJO スキンリハビリテーションセンター訪問, シュミレーション授業参加を通して—. 鹿児島大学医学部保健学科紀要2017; 27(1): 79-85
- 4) 清水佐智子, 益満智美: 韓国におけるホスピス緩和ケア研修報告 Seoul St. Mary's Hospice & Palliative Care Center 見学を通して. 鹿児島大学医学部保健学科紀要2017; 27(1): 87-92
- 5) 内田麻衣美: 子どもと家族のケア6, 7月号. 日総研, 名古屋, 2017, p2-7
- 6) 橋本麻由里, 泊祐子, 山内栄子他: 韓国における上級実践看護師 (APN) 制度と教育. 岐阜県立看護大学紀要 2009; 10(1): 51-58
- 7) 筒井真優美. 小児看護学 子どもと家族の示す行動への診断とケア. 第8版. 日総研, 名古屋, 2016, p405
- 8) 堀妙子, 奈良間三保: 小児看護学概論 小児臨床看護総論. 第13版, 医学書院. 東京, 2017, p96
- 9) 原田香奈, 相吉恵, 祖父江由紀子: 医療を受ける子どもへの上手なかかわり方. 第1版, 日本看護協会出版会, 東京, 2013, p169-171

Report of 2017 Global Nursing Student Exchange Program: Student Exchange Program with Red Cross College of Nursing, Chung-Ang University

Naoko Yamamoto¹⁾, Masami Mizuno¹⁾

1) School of Health Sciences, Faculty of Medicine, Kagoshima University

Address correspondence to: Naoko Yamamoto
8-35-1, Kagoshima City, 890-8544, Japan
TEL/FAX: 099-275-6791
E-mail: naoko-y@health.nop.kagoshima-u.ac.jp

Abstract

As a part of the course “Pediatric Health Sciences”, students in the School of Health Sciences of the Faculty of Medicine at Kagoshima University in Japan, joined the student exchange program with Chung-Ang University in South Korea. The exchange students participated in classes at the Chung-Ang University and visited university hospital to understand more about nursing systems in South Korea.

This report, seeks to share what students learnt through this program.

Students recognized cultural similarities and differences between Japan and South Korea, especially in medical fields. Accordingly, the professors at Kagoshima University should make efforts to increase opportunities and educate students about cross-cultural understanding and foreign languages through lectures or programs. This would help students play an important role in contemporary global society.

Key words: Global Nursing Student Exchange Program, Pediatrics Nursing, South Korea